2. アタッチメントの発達と養育条件

ー家庭児と保育園児の比較からー

繁　多　　進（横浜国立大学）

アタッチメントとは，一般的に，ある人間や動物が自分自身と他の特定の対象との間で形成する情愛的な結びつき（ afeectional tie ）と定義されている。人間の乳児にとって，この特定の対象というのは，ほとんどの場合，母親であり，母親は乳児の最初にして主たるアタッチメント対象となる。ボウルビィ（ J.Bowlby 1958）が子どもの母親に対する結びつきというこの現象を従来のemotional dependence という用語にかえて，attachment という概念を用いるよう提案して以来，アタッチメントに関する研究はこの20余年に急速ないきおいで発展してきている。

ボウルビィの理論は，かつてロンドンのタビストック・クリニックで同僚であったエインスワース（M.Ainsworh）の実証的な研究結果に負うところが大きいので，ボウルビィーエインスワース理論と呼ばれることも多い。彼等の理論によれば，子どもが母親へのアタッチメントを形成するためには，少なくとも母子間に一定量以上の相互作用が存在することが必要だとされている。勿論，子どものシグナルに対する母親の反応の敏速さや適切さといった相互作用の質的な側面も重要ではあるが，それはアタッチメントの形成そのものにかかわるというよりも，健全なアタッチメントを形成するか，不安をともなったアタッチメントを形成するかという，アタッチメントの質的な側面に影響する要因である。

このように考えてくると，母親との相互交渉の量が制限されている保育園児は，家庭で養育されている子どもに比べて，母親へのアタッチメントを形成するうえで不利な状況に置かれているようにも思われる。はたして保育園児のアタッチメントの発達は家庭で養育されている子どもに比べて逸脱したものであろうか。この点に関して，これまでに欧米でなされた研究結果は必ずしも一定したものではない。つまり，保育園児のアタッチメントの発達には問題があるとするものと，家庭群と比してなんらの差異もみられなかったとするものとがあり，一定した見解は得られていない。

今日，働く母親は益々増加の傾向をたどっている。しかも，母子相互作用の量的な不足が母子関係の発達になんらかの影響を及ぼしているのではないかという不安をいだきながら働いている母親も少なくない。保育園児は，①日中，母子分離をしいられている。②集団で保育されている，③母親と保母という複数の養育者（ multiple mothering ）によって養育されている，という3点において，家庭児とは異なった状況で生育している。このような養育条件が保育園児の母親へのアタッチメントの発達にどのような影響を与えているかを明らかにし，そして，このような状況下において，子どもが母親への健全なアタッチメントを発達させていくための要因とはどのようなものであるかということを究明していくことは，急を要するきわめてプラクテイカルな課題といえるであろう。

このような観点から，母子相互作用に関する総合研究の研究協力者のひとりとして，これまでの数年間に筆者らが取り組んできたこの課題に関する研究結果を概観し，同時に，今後の研究の展望を試みることにする。

1. 質問紙調査

家庭児と保育園児のアタッチメント行動のおおよその傾向を知るために，まず，質問紙調査を行なった。調査は母親への面接で行なったが，調査対象となったのは，生後6ヶ月か12ヶ月をもつ母親402名（家庭206，保育園196），15ヶ月から27ヶ月までの子どもをもつ母親454名（家庭250，保育園204）で，6ヶ月から12ヶ月までの群と15ヶ月から27ヶ月の群では異なった質問紙を用いた（母子研究№4.1981参照）。

この質問紙調査から得られた結果は次のようなものである。

①アタッチメント行動の開始時期に家庭児群と保育園児群の間に差異がみられ，家庭児群が生後6ヶ月から7ヶ月にかけてアタッチメント行動が急速に増加するのに対し，保育園児群は生後7ヶ月から8ヶ月にかけて急上昇するというように，約1ヶ月のズレがみられる。図1はエインスワースがウガンダにおける生態学的研究で見出した12の指標のうち，それぞれの月齢児が平均いくつそれらの行動を示すかをあらわしたものであるが，生後6ヶ月と7ヶ月の時点で両群間に有意な差が認められる。しかし，生後8ヶ月以降は両群間にまったく差はみられなくなる。

②生後15月以降では，母親との接触を求める行動，母親の後を追う行動，母親との再会を喜こぶ行動といった母親との接近・接触を志向する行動は全般的に保育園児の方が高い。しかし，母親を安全の基地として探索活動をする度合は家庭児群の方が高い。表1は両群間に有意差があった項目をとり出してまとめたものである。ここで，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳというのは15ヶ月から27ヶ月までの調査対象を4群に分類して統計的処理をしたための各群をあらわすもので，Ⅰ群は15ヶ月から17ヶ月までの子ども，以下，Ⅱ群が18ヶ月～20ヶ月，Ⅲ群が21ヶ月～23ヶ月，Ⅳ群が24ヶ月～27ヶ月の子どもたちである。

③保育園児のⅢ群，Ⅳ群では母親への接近，接触行動や後追い行動と母親の拒否的養態度や子どもに対するきびしい見方と相関がみられた。つまり，1歳9ヶ月から2歳3ヶ月の保育園児の中で母親への接近・接触要求が強く，母親の後を追いかける行動を激しくする子どもは，養育態度が比較的拒否的で，子どもに対する愛着もそれほど強くない母親をもった子どもたちであったということである。

④しかも，保育児Ⅲ群とⅣ群の母親への接近・接触行動は指しゃぶりや夜泣きとも相関がみられたことから，2歳前後で母親との接近・接触を激しく求める保育園児には，母親へのアタッチメントに若干不安定の側面があることがうかがわれた。

以上，質問紙調査から得られた結果をふまえてさらに，保育園児のアタッチメントの質的側面を検討するために，実験室的方法を用いて保育園児群と家庭児群の比較を行なった。

2. Strange Situation法による比較

エインスワースら（1969）が標準化した，Strange Situation と呼ばれる実験室的方法を用いて両群の実験室内での行動の比較検討を行なった。被験者は満1歳児48名（家庭24，保育園24），満2歳児42名（家庭22，保育園20）で，誕生日前後1週間以内に実験を行なった。実験室の広さは9フィート×9フィートで，実験は8つのエピソード（表2）から構成されている。

この実験の結果，家庭児と比較して保育園児に特徴的な行動として次のようなものがあげられた。これらの特徴はほとんど1歳児にも2歳児にも共通してみられたのである。

①保育園児は場所のStrangenessに圧倒されることが少なく，入室後すぐに玩具で遊び始める。

②しかし，母親との分離には保育園児の方がより強い不安を示し，母親との分離によって探索活動は激減し，分離時のcryingは1，2歳児とも保育園児の方がはるかに高い。また，母親との再会によっても，その不安は容易に解消せず，探索活動は分離前のレベルまで回復しない（図2，図3）。

③このことは，母親との再会エピソードで保育園児の母親への接近・接触要求の強さや接触維持欲求の強さ（図4，図5）でも示されている。保育園児は母親との分離を重ねるにしたがって不安を高め，母親との接近・接触を要求し，母親から離れようとしない。そのため，母親とのdistance interaction は家庭児群に比べ極端に少なくなる。

④Stranger（女子学生）に対しては，保育園児の方がより拒否的であった。Stranger からの働きかけを受け入れようとする者が家庭児に比べて少なく，母親不在場面ではstranger のなぐさめによってcrying や母親さがし行動をやめようとはしない。

以上のように，保育園児は毎日のように母親との分離を経験しているにもかかわらず，strange situation での短い分離に強い不安を示しかも，分離が解消された再会エピソードでもそ

の不安は容易に解消せず，母親にくっついて離れないという行動を示すものが多かった。とくに2歳児の場合，家庭児には母親との分離になんとか耐えることができ，また，母親との再会によってすぐに不安を解消して，母親から離れて探索活動をしたり，母親とのdistance interactionをすることができるものが多いのに対し，保育園2歳児は1歳児とそれほど変らない行動をするものが多い。つまり，家庭児の場合，1歳児から2歳児へかけてアタッチメント行動がproxinal mode からdistal mode へと着実に移行していく傾向が見られるのに対し，保育園児の場合，その傾向が家庭児ほど顕著ではないのである。

このように，strange situation 法による検討でも，保育園児の母親へのアタッチメントに家庭児のそれに比して若干不安定な側面がみられた。しかし，これは母親へのアタッチメントであって，保育園児の場合は父親に対しても母親に対してと同程度のアタッチメントを発達させているかもしれないとも考えられる。ごく一般的に考えれば，共働きの場合，そうでない場合よりも，父親がより育児に参加しなければやっていけないであろう。そういう意味で，保育園児の方が家庭児よりも父親へのアタッチメントをより発達させているのではないかという予測もなりたつであろう。その点を検討するため，父親をも含めた実験室的研究を試みた。

3. 父親および母親に対する2歳児の行動

strange situation法をmodify して，父親を含めた9つのエピソードからなる実験事態を構成した。エピソード1は導入エピソードなので分析の対象にならないが，エピソード2は父，母，子，エピソード3は母，子，エピソード4は母，子，stranger，エピソード5は子，stranger，エピソード6は父，子，エピソード7は母，子，エピソード8は子どもだけ，エピソード9aは子，stranger，9bが父，子，stranger，9cが父，母，子，という事態になっている。被験者は2歳児36名（家庭20，保育園16）とその両親である。

図6は遊びながら活発に移動する程度を示したものであるが，保育園児はstranger が入室するエピソード4で急激にこの活動は下降し，strangerと子どもの2人だけになるエピソード5でさらに下降する。父親が入室するエピソード6で急上昇するものの，エピソード8でaloneになった後の父親との再会エピソードではこの活動はもはや活発にはならない。もっとも，9bでは探索的操作は家庭児とほぼ同じレベルまで回復しているので，父親の入室が子どもの探索活動の活発化になんらの影響も及ぼさなかったとは云いきれない。

探索活動以外の行動でも，父親に対する両群間の行動には顕著な差異はなく，有意な差ではないものの，接近・接触行動は保育園児が高く，distance interaction は家庭児の方が高いという，母親に対する行動とほぼ類似した傾向が認められたことから，保育園児の方が父親に対してよりよいアタッチメントを形成しているとは言えない結果となった。

結局，保育園児の場合も，母親へのアタッチメントの不十分さを父親へのアタッチメントで補うという形で父親へのアタッチメントを発達させているというものは少なく，母親への安定したアタッチメントを形成していくようである。

また，この研究でも，保育児のstrangerに対する態度に家庭児のそれとは顕著な差異がみられ，strangerとの相互交渉を拒否する行動が目立った。我々は乳児院児のstrange situation 法による研究で，乳児院児が家庭児よりはもちろんのこと，保育園児よりも，strange に対してはるかに拒否的であるという資料を得ている。このことは，multiple motheringを経験しているからといって，それがそのまま対人関係のひろがりにつながるものではないことを意味しているし，母親という“ただひとりの人”との信頼に満ちたアタッチメントの形成が，その他の二次的なアタッチメント対象をひろげていくことにつながることを示唆しているともいえる。

そういう意味では，保育園児の場合，母親とのアタッチメントを形成した後の入園か，それ以前の入園かということは，その後の母子関係の発達や対人関係能力の発達にとって重要な要因なのかもしれない。この問題を検討する手がかりを得るため，我々は保育園において8ヶ月間の継続的観

察を行なってみた。

4. 入園時月齢と母親へのアタッチメント

観察対象児となった園児は18名で，生後9ケ月から11ケ月の間に入所した乳児6名－a群，生後5ケ月から8ケ月の間に入所したもの7名－b群，生後3ケ月で入所したもの5名－c群である。観察は入所当初の1週間は毎日，その後は週に1回の割合で行なった。

図7は，朝，母親との分離時に示す乳児の行動をその平均得点で示したものである。a群は入園当初強い分離不安を示すが，その後しだいにおさまっていく。b群は入園後しばらくは分離不安をほとんど示さないが，生後10ケ月になると急激に不安を示すようになる。c群は生後11ケ月になってもほとんど不安を示さない。

図8は，夕方，母親が迎えに来たとき，母親との再会で歓迎を示したかどうかを示したものである。A群は12ケ月以降すべての子どもが歓迎行動を示し，b群もほぼ同様であるが，c群は生後10ケ月から歓迎行動は増加するものの，a群やb群に比べれば少ない。

このようにみてくると，生後3ケ月で入所したa群の子どもたちは母親へのアタッチメント行動の開始時期がだいぶズレてくるようである。a群の子どもたちについては生後11ケ月までしかフオローしていないので，その後どのような経過をたどるかは予測できないが，生後11ケ月という時点で比較するかぎり，生後3ケ月という早期入所が子どもの母親へのアタッチメントの形成を遅らせる要因になっていると言わざるを得ないであろう。勿論，このことが永続的に母子関係に望ましくない影響を与えるかどうかという問題とは，また別の問題である。

以上，養育条件とアタッチメントの発達に関して，ここ数年間の間に我々が行なってきた4つの研究について，その結果をごく簡単に概観してきた。これらの研究を総合すると，家庭児群と保育園児群というように，両群間の比較をその平均得点でするならば，たしかに，保育園児群のアタッチメントにやや不安定な側面が認められることは否定できないであろう。しかし，個々にみるならば，母親へも父親へもきわめて健全なアタッチメントを発達させている保育園児も数多くいる。このことは実験に立ち合っていて実感として感じることでもある。我々は母子の接触が制限されている保育園児が健全なアタッチメントを形成するための要因は何かという課題に向って研究を進めてきたし，事実，その要因の検討も行なってきたがその検討はいまだ不十分なためにここでは一切ふれなかった。今後，この課題に向って一層の研究が必要であることを痛感している次第である。

なお，ここで揚げた研究は，林睦子，荒巻万友美，早野里美，上杉忠司，宮沢文子，小林かおり竹内ひろみ，天野桂子，高部住宜などとの共同研究である。

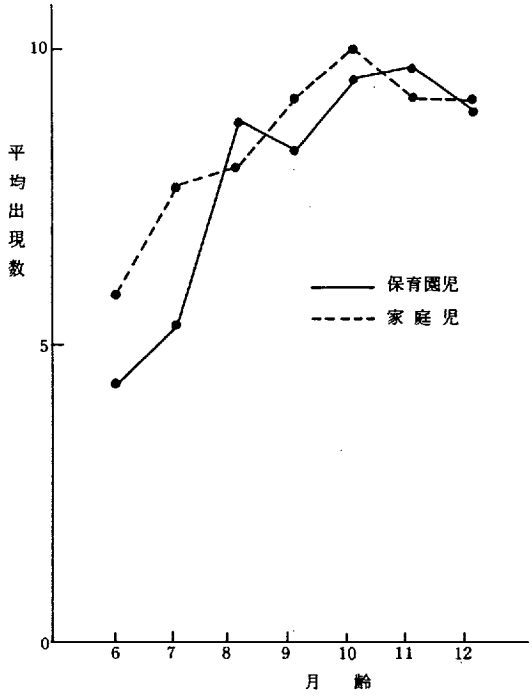

図1　アタッチメント12指標の平均出現数

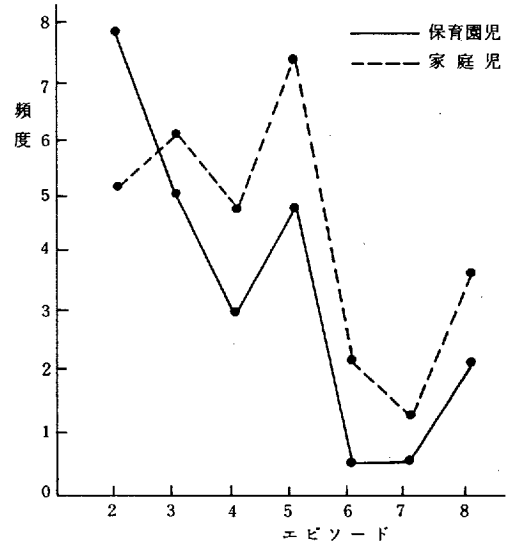

図2　探索的操作（1歳児）

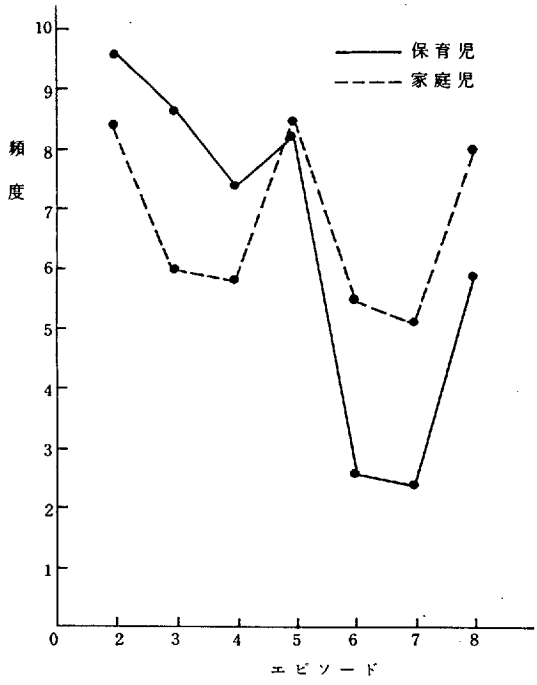

図3　探索的操作（2歳児）

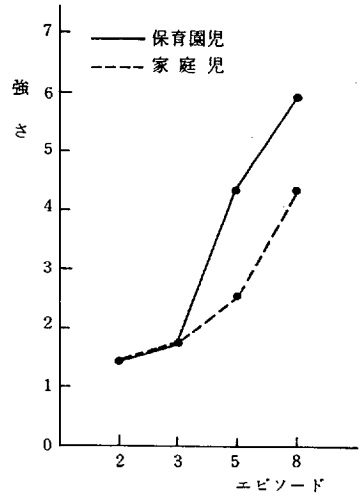

図4　母親への接触維持行動（1歳児）

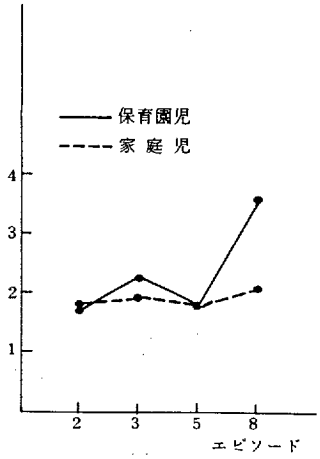

図5　母親への接触維持行動（2歳児）

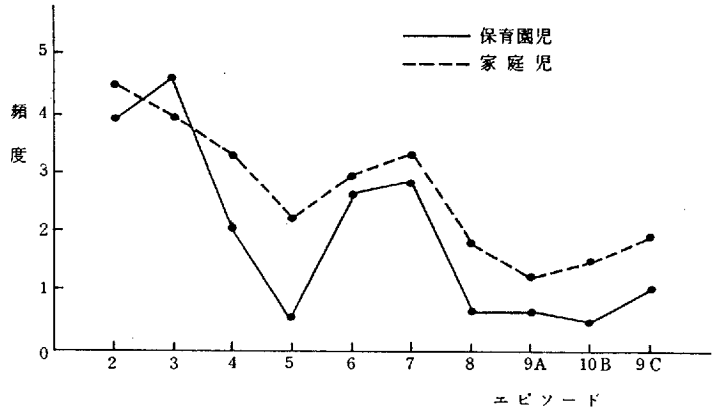

図6　探索的移動（父親を含めたStrange Situation）

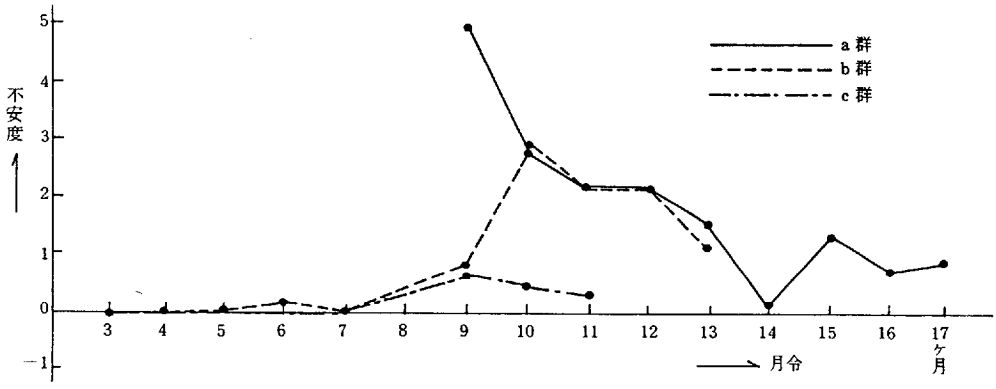

図7　月令による各群ごとの母親との分離不安の推移

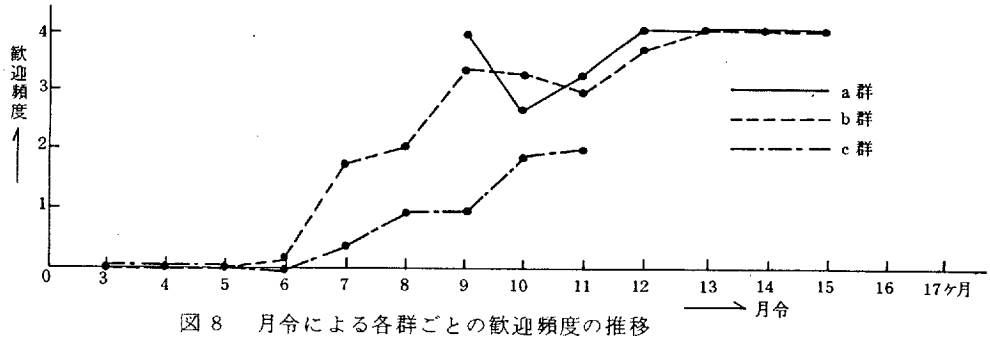

図8　月令による各群ごとの歓迎頻度の推移

表1.　家庭児と保育園児とで有意差のあった項目

＊家ー家庭児　保ー保育園児

お母さんにくっつき，接触を求める	家＜保（Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ.Ⅳ）
なるべくお母さんの近くにいようとする	家＜保（Ⅲ）
お母さんがいなくなると，お母さんを呼び求める	家＜保（Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ）
お母さんの後をくっつき回る	家＜保（Ⅲ）
まるで抱いてとでもいうように両うでを上げ ほほえみ声を出して喜びのしぐさをする	家＜保（Ⅳ）
お母さんから離れてひとりで遊び，時々お母さん のもとに戻る。	家＞保（Ⅱ）
お母さんの見える範囲であれば，30分以上 楽しく遊んだり，探索してすごすことができる	家＞保（Ⅰ）
お母さんがいる時，ひとりで一生懸命に遊んでいる	家＞保（Ⅲ）
お母さんの目の届かない所へひとりで行く	家＞保（ⅡとⅢ）
なじみのある所，及びなじみのない所で， お母さんの目の見えない所まで行くことがある	家＞保（ⅠとⅡ）

表2. Strange Situation 法の概要

Numler of Episode	Persors Present	Duration	Brief Description of Action
1	Mother Baby & Experimenter	30 sec.	実験者が母親と乳児を実験室に案内し立ち去る
2	Mother & Baby	3 min	乳児が探索している際中は，母親は干渉しない。もし必要ならば，2分後おもちゃの方に乳児を誘導する。
3	Strarger Mother & Baby	3 min	Stranger 入室，入室後は以下のように行動する。 A（1 min）黙って座っている B（1 min）母親と親しく話す C（1 min）乳児に話しかける 3分後母親退室（目立たないように）
4	Stranger & Baby	3 min or less ＊1	第1回目の分離エピソード stranger は乳児に合わせた行動をとる
5	Mother & Baby	3min or more ＊2	最初の再会エピソード，母親は子どもを迎え落ちつかせる。そして再び遊びに向かうようにうながす。 その後「バイバイ」と言ってから退室
6	Baby alone	3min.or less	第2回目の分離エピソード
7	Stranger & Baby	3 min. or less	第6エピソードに続く，分離エピソード，stranger は乳児に適合した行動をとる
8	Mother & Baby	3 min	第2回目の再会エピソード 母親入室，子どもを迎え，抱き上げる そのあいだに stranger は目立たぬように退室する。

＊1. 乳児の苦痛が激しく，それ以上続けても行動に変化がないと思われる場合には，短縮する。
＊2. 乳児が再び遊び（探索）に熱中するまでに，十分な時間が必要な場合は，延長する。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

アタッチメントとは,一般的に,ある人間や動物が自分自身と他の特定の対象との間で形成する情愛的な結びつき(afeectional tie)と定義されている。人間の乳児にとって,この特定め対象というのは,ほとんどの場合,母親であり,母親は乳児の最初にして主たるアタッチメント対象となる。ボウルビィ(J.Bowlby 1958)が子どもの母親に対する結びつきというこの現象を従来の emotional dependence という用語にかえて,attachmcnt という概念を用いるよう提案して以来,アタッチメントに関する研究はこの 20 余年に急速ないきおいで発展してきている。

ボウルビィの理論は,かつてロンドンのタビストック・クリニックで同僚であったエインスワース(M.Ainsworh)の実証的な研究結果に負うところが大きいので,ボウルビィーエインスワース理論と呼ばれることも多い。彼等の理論によれば,子どもが母親へのアタッチメントを形成するためには,少なくとも母子間に一定量以上の相互作用が存在することが必要だとされている。勿論,子どものシグナルに対する母親の反応の敏速さや適切さといった相互作用の質的な側面も重要ではあるが,それはアタッチメントの形成そのものにかかわるというよりも,健全なアタッチメントを形成するか,不安をともなったアタッチメントを形成するかという,アタッチメントの質的な側面に影響する要因である。